

TECUM Open Workshop on Mathematics Education '2019

TECUM Workshop とは何でしょう？ その背景、その目的、その目標

TECUM は《より良い数学教育の実現》のために是が非にも必要なことは、学校数学と現代数学との間（少し大袈裟に言えば、学習の対象としての学校数学と研究対象としての現代数学との間）に存在する深い断絶を気楽に容認して、両者を「別々の数学」として完全に分離することにより、学校数学の中に潜む深遠な数学的思索への可能性を否認する、現代の支配的な数学教育の風潮を打破することであり、そのためにはこの風潮の依って来ることの根拠に迫り、このような安易な風潮に流されない、生き生きとした本来の数学教育の実現するための知恵を、数学的な英知と思索への尊敬、そして若い世代への共感に基づいて探る、同志的な連帯と厳しい切磋琢磨に基づく研究的な活動を重視して来ました。研究という以上、重視するのは、独創性と斬新性と立証性であり、安易な他人真似、十年一日的な凡庸さ、井戸端会議的な思い付きや自己の経験の絶対化に対する徹底した批判的態度が求められます。

しかし、このような研究的な姿勢だけでは、日々の教育実践で、多様な能力と多様な環境で育った生徒達を抱えて頑張っている学校現場の先生方にとって、《その研究が明日の教育にどう役立つのか》といった、切実な疑問に答える実践性に乏しいことも否めません。ある意味で、大学の数学が、《いま学んでいる数学のこの抽象性が自分の関心とどう結び付くのか》という多くの理系学生にとっての悩みに答える実践性に乏しいことに似ています。

そこで、「国家百年の大計」と呼ばれる教育の問題を、ひとまず、棚上げして、「明日から1学期の授業計画」を根本的に考え直す機会となるような、現場教員のための研鑽の場を、講師の講義を聞くといった一方向的な「研修会」としてではなく、《相互に議論》しあいながら、《いろいろな正解》を考える、《双方向的で作業的な》Workshop という形で実現しようというものです。

このような、実践性に重心を移した Workshop な集まりは、普段の忙しいスケジュールの中では、医学関係学会で一般的な luncheon seminar として設けている筈ですが、夏期休暇中は、それぞれにお忙しい先生方も、ちょうど都合がつけばお集まりいただけると考えて、今年度は、8月の三日間を Workshop にあてました。

教材は印刷製本費の関係から合冊にしますが、3つの Workshop はそれぞれ特徴のある、内容的には独立なものです。

いずれも、参加なさった現場の先生方の明日からの授業が変わることを目標として教材を用意しています。なお、昨年参加なさった先生がいらっしゃると、Workshop 1 の教材が、昨年の「方程式」ともとても良く似ています。教材の一部は、昨年と重なる可能性がありますが、基本的には別とお考えください。

